
<メンバー>

研究者： 教授 鈴木宣也
教授 赤羽亨

<活動の概要>

デザイン思考などのデザイン方法論について、実効する人やその経験則、対象としたフレーム自体の設定、あるいは提案した解決方法自体の影響も含め、方法論自体に関する検証の時期に来ています。社会性や人々の価値観の変化も踏まえ、新たな問いのあり方やデザインプロセスが関わる影響やその範囲についてを検討する必要があると考えます。デザインは課題解決に対する一つのツールではなく、デザインが関わるプロセスの中で、課題との関係性を再検討しなければなりません。これまでの原因と結果に基づいた近代的デザイン方法を乗り越えるためにも、全体性やその影響なども含め試行し、デザインする人とデザインする対象との関係を考え、社会とデザインが影響する範囲を検討したい。

そこで本プロジェクトでは、地域や企業と対話を進め、デザインの役割について調査します。互いが交差するプロトタイピングや共同研究へ向けた前段階の対話も含め、フレームの設定やビジョンの共有やプロセスの理解も含め、それぞれの関わりについて調査します。デザインと実際の対象間をブリッジさせ、その上に立ったことで得られる新しい視点を通して、今後のデザインについて検討していきます。

<活動内容>

本年度のプロジェクトでは、地域や企業と対話を進め、デザインの役割について調査する活動を展開しました。学外との関わりの中で、互いが交差するところを確認する対話方法も含めながら、活動しようとしているフレームの設定や、協働者とのビジョンの共有、プロセスの理解やプロトタイピングも含め、それぞれの関わりについて実践あるいは調査しました。具体的には3つの対象をターゲットとしました。

- ・「大垣市」との共同研究「イアマスこどもだいがく」
- ・「飛騨の森でクマは踊る」を中心とする広葉樹の活用に関する調査「飛騨家具ーパラメトリックデザイン」
- ・岐阜県に居住する外国人をターゲットに、広告業と共に支援についての実践方法を模索する「岐阜外国人支援」



1. イアマスこどもだいがく

イアマスこどもだいがくは、芸術や科学といった領域を越えた新しい「もの」や「こと」を創造する教育研究の一環として、小学生向けに図画工作や科学実験といった枠組みを超えた、思想や発想の育成を目指した大垣市との共同研究です。2023年度は「ゴムの森」を実施しました。2024年度はインターネットをはじめとした多様なネットワークのあり方を体感するワークショップ「もしもしワールド ～糸でんわから考える通信コミュニケーション～」を企画運営しました。

「もしもしワールド」は糸電話を使い、通信コミュニケーションについて遊びながら考えるワークショップです。1対1の糸電話だけではなく、複数人でルールを変えながら、情報伝達のための通信の仕組みを体感してもらいます。この「もしもしワールド」は今年初めて取り組むワークショップのため、プロジェクトメンバーで試作や実験を重ね、ワークショップをデザインしました。7月27日に小学3～6年生を対象に開催しました。

通信の仕組みの例として、メールは「時間がかかっても、確実に伝えることを重視する通信」ですが、動画配信は「多少のデータの欠損が生じて、遅延なく伝えることを重視する通信」です。一口に「通信」と言っても、その内容や状況によって伝達方法は異なります。こういったことを、糸電話の伝言ゲームによって工夫しながら探っていきます。

技術面だけでなく、「通信を介したコミュニケーション」もこのワークショップの重要なテーマです。電話やメールやSNSなどでのコミュニケーションは、対面での会話に比べて表情や仕草などが無いため細かなニュアンスが伝わりにくく、それゆえに誤解も生じやすくなります。大人でも、Zoomを介した会話にもどかしさを感じる人も多いと思います。これから通信コミュニケーションに触れる機会が多くなる小学生に、その「伝わらないもどかしさ」を前提として伝え方を考えていくきっかけになることを想定しデザインしました。

今や電話やインターネットなどの通信技術は、生活に欠かせないインフラになりました。それらが便利でスムーズになるほど、当たり前存在する空気ようになります。そしてそれらを介したコミュニケーションも「伝わる」ことを前提にしてしまいがちです。「伝わる」とはどういうことか、このワークショップの企画を通して、メディアリテラシーについて改めて立ち止まって考える機会をデザインしました。

これらの活動内容は今年度の紀要に掲載予定。また、RCICの連携報告にも映像も含めWebページに掲載。

RCIC 連携報告

https://www.iamas.ac.jp/rcic/activities/202404_202408/



2. 飛騨家具ーパラメトリックデザイン

「飛騨家具ーパラメトリックデザイン」では、まず、広葉樹に関する現状を捉えるため、飛騨地方へリサーチトリップを実施しました。2014年から飛騨市は「広葉樹のまちづくり」と題し、広葉樹の活用を推進しています。リサーチトリップでは、広葉樹の伐採から流通、活用までのそれぞれの工程に現場で関わっている方々を訪れ、現在の状況をリサーチしました。

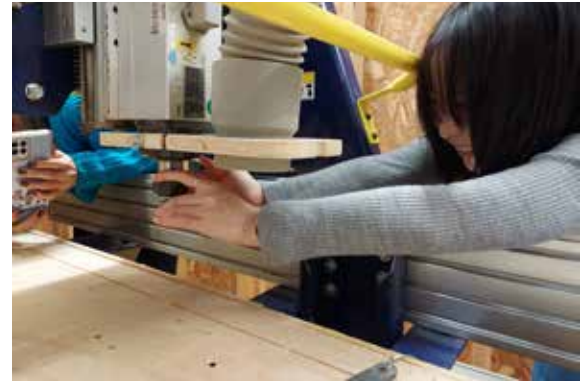
木材というと家や家具に使われており、その多くは針葉樹を使用している。広葉樹は針葉樹のように真っ直ぐではなく、また木の色や太さが一様ではない上に樹種が多く、そのキャラクターの多さが特徴です。広葉樹は針葉樹と比べ個性が強いいため、一点ものの家具に使われることが多く、大量生産の製品の材にはむかないとされてきました。飛騨高山地域は針葉樹よりも広葉樹が多いという特徴があるため、それらの広葉樹の活用が課題となっています。しかし広葉樹の多くはチップとして加工され、燃料やパルプなどへの活用がほとんどで、他の活用方法を見出すことが求められています。そこで今後の可能性についてリサーチしました。

リサーチを受け、デジタルファブリケーション機器を用いた可能性について、現在、プロトタイプを制作しながら検討しています。主に Shopbot という木材を加工する CNC と呼ばれるコンピュータ制御の大型の機械を用いて、切削する機構から、広葉樹の新たな活用方法を検討しています。実際に家具を作る体験をしたり、木目に合わせて溝を掘るなどのプロトタイプを作りながら検討しています。飛騨の工房「飛騨職人生活」には本学と同じ Shopbot が導入されています。現場では実際にどのように利用しているのか、また広葉樹を切削する場合にどのような工夫をしているのかなどインタビューも実施し、加工技術も合わせてデザインの対象を模索しています。

今年度は、引き続きリサーチとプロトタイプ制作を実施しました。

リサーチでは、「飛騨の家具フェスティバル」を訪問しました。今年度のテーマ「心の豊かさ」から見出された「樽葺き（くれぶぎ）」をキーワードに作られたメインブースを中心に、各家具メーカーや職人の展示が並びました。トークイベントでは「飛騨の森と人との多様性」と題し、焼畑のサイクルについて紹介され、「木を伐ることで生み出される生態系もある」ことについて議論されました。また、「ひだ広葉樹活用シンポジウム」では、飛騨地域の川上（林業）・川中（製材）・川下（製造）の人々が一同に介して、現状の課題や取り組んでいることなどについて意見交換しました。

プロトタイプ制作では、オープンソースの家具図面から Shopbot によってパーツを切り出す家具の制作をしました。Hot Desk と呼ばれる机をベニヤ板から切り出して組み立てる工程を実施しました。制作過程における課題を抽出しました。また切り株を用いた照明のプロトタイプ制作を実施しました。切り株の年輪に沿って Shopbot や CNC を用いて切り出し、アクリル素材や光ファイバーなどを用いて照明をデザインしました。



3. 岐阜外国人支援

岐阜県庁の「外国人活躍・共生社会推進課」へのヒヤリングを実施し、外国人についての調査をしました。言葉の壁はもちろんのこと、教育、ライフプラン、キャリア問題、ヤングケアラー、地域との接点、災害・医療問題など、さまざまな課題があることがわかりました。

あまり知られていないこととして、岐阜県には多様な国々から来た外国人が暮らしているという現状があります。現在、東南アジアの多様な国々から多くの労働者が働いており、一方で、それらの人は行政との関わり方がわからない、あるいはそもそも接点を持っていないという現状があります。また長年、日本に居住している人は、子どもと共に暮らしていますが、子どもの教育に対するケア、あるいは高齢化へのケアなど、行政との関わりを必要として人が多くいるということもわかっています。しかし、行政と支援の必要な人々とのつながりが難しいのが現状です。こうした現状はどのような要因によるものなのか、デザインによってどのように関わりを作れるのか、調査しながら、産学官連携として、大阪の広告企業とともに協働しながら、研究の枠組みも検討しながら進めています。

今年度は、関係機関や当事者へのインタビューを試みるデザインリサーチを実施しました。インタビューの結果から、現状を分析し、今後の取り組みについて検討を進めています。

- ・ 岐阜県国際交流センター
- ・ OKB 総研
- ・ 多文化共生リソースセンター
- ・ 技能実習生等

